

---

# 或る姫君に捧ぐ詩

霧島 燈子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

或る姫君に捧ぐ詩

### 【Nコード】

N3848C

### 【作者名】

霧島 燈子

### 【あらすじ】

幼い頃に遊んでもらった少年・コウタを一途に思う姫君は成長するにつれて国民を愛し・国民に愛される姫君へと成長した。しかし或る夜、国が何者かの襲撃を受けて崩壊する。ガラス職人に引き止められて目立たぬ路地裏にいたため姫君と職人は難を免れたが、二人を除く他の国民・王族すべてが死んでいた。「もう独りになるのは嫌だ」と、姫君は職人の旅に同行することを決める。これは姫君と職人の旅の物語。

## プロローグ

とある国の王妃は、ある日女の子を産みました。先の男の子が幼くして亡くなったため、王様はとても喜びました。女の子はユウ口と名付けられ、王様と王妃様にかわいがられすくすくと育ちました。

姫が五歳の誕生日、姫の世話係は姫を連れて外の森へ遊びに行きました。姫は生まれてこの方屋敷より外へ出たことが無かったため、初めての外に呆れるほどはしゃぎます。

しかし気づけば時すでに遅し。姫は、森の深部へ迷い込んでしまっていたのです。世話係を兄として慕っていた姫は、世話係を呼び続けます。

「にいさま……にいさまあつ」

最初は気付かなかった姫ですが、誰もいないことに気付いて泣き始めます。そして進むたびに、さらに深部へと迷い込んでしまうのです。

森の奥で胡弓を弾いていた少年は、少女の泣き声にふと手を止めた。泣き声はしだいにこちらへ近付いて来る。この森に足を踏み入れる人は滅多におらず、二週間この森を探索しても人の影一つ見当たらなかった。それが、今になって幼子の泣き声が響く。

気になった少年は、胡弓をケースに片付けてそれを担ぎ、声のするほうへ向かった。森の御神木とされているらしい菩提樹という木の下で、少女が膝を抱えて泣いている。

「……どうかしたんですか？」

声をかけてみる。少女は涙で濡れた顔を上げ、少年の顔を見た。何も言わない少女の横に座り、少年は胡弓を取り出す。心地よい音色が森に響く。少年の口からぼつりぼつりと呟かれるコトバの数々。

ゆったり空気に浸透して、その音は響く。いつの間にか泣きやんでいた少女は、もっと聴かせてというように少年の腕をつかんだ。

「こんにちは。どうかしたんですか？」

「コウねっ、まいごになっちゃったの」

「迷子？ それは大変ですね……どこから来たんですか？」

「あっち！ あっちの、おっきなおうち！」

「おっきなおうち……って、一国の姫君なんですか」

コウタは森の外にある古く大きな洋館を思い出しながら、言う。この国で一番大きく、一番頑丈そうな造りだったという記憶がある。そして城下町とその屋敷との間には大きな川があり、そこをわたる方法は昼間だけ架けられている橋しかなかったはずだ。屋敷と森との間には巨大な堀以外の隔たりはなかったたので、もしかすると堀のどこかにある穴から抜け出てきてしまったのかもしれない。

息をついて、少年は少女の頭を撫でた。

「じゃあ僕が連れて行って差し上げますから、帰りましょう？」

「やっ。おじちゃん、なんて言うの？」

「おじ……ま、いいか。僕はコウタ。詩人です」

「シジン？ コウタ、シジンってなに？」

「詩を詠う人。詩詠みの詩人だよ」

にっこり笑みを浮かべて、詩人・コウタはそう口にする。姫はコウタと同じようににっこりと満面の笑みを浮かべて、立ち上がる。そうして、興味深そうにコウタの持っている胡弓を見た。

「なあに、それ？ きれーねっ」

「ああ、これですか？ 胡弓という楽器です。聴きたいですか？」

問えば、首が千切れるのではないかというほどの勢いで姫は首を何度も縦に振る。コウタは一度息をついてから、弓を持ち、皮面を右にして胡弓を左腿の付け根に乗せる。左手の指で弦を押さえて音階をとりながら、右手に持った弓で弦をこすると、先ほどのような音色が響く。ぽつぽつと紡がれるコトバ。

コウタを背凭れに、姫は心地よさそうに首を左右に揺らす。

気付けば森は肌寒くなり、日暮れを告げていた。胡弓を弾くコウタの横で姫はいつの間にか眠りについてしまったらしく、すやすやと規則的な寝息を繰り返している。

コウタは姫を起こさないように胡弓をケースに片付け、胡弓を持ち姫を抱いて歩き出す。森を抜けてすぐのところに男が一人いた。ものすごくあわてた様子で森から出てきたコウタのほうへやって来る。

「すまないが、この森の中に……姫様！ ああよかった、あなたが見つけてくれたんですか？」

問いかけようとして、コウタの腕の中にいる姫を見て男は心底安心したようにコウタのほうへ近寄ってきた。コウタは男に姫を渡し、くるりと踵を返した。

男はもうコウタのほうを気にしていないようで、姫を抱きかかえて泣いている。

（あの男は旅に向かないな……疑われない人間は旅で早死にする。あの姫君も、旅には向かないだろう）

森の深部、小屋の中。一人胡弓を弾きながら、コウタは自問自答を繰り返した。長い時間引き続けた後で、くつと口元を歪めた。

数日後、城の中。姫は目が覚めて、部屋を出る。部屋の外には今まさに扉をノックしようとしている兄の姿があった。

「にいさまっ」

「おはようございます、姫様。稽古の時間ですので、お迎えにあげました」

「え……じゃああとでいく」

それだけ言って姫は扉を閉めて、服を着替える。王家の仕来りで、王家に生れた者はその性別に関係なく五歳から武術を嗜むことになっている。姫は弓術を嗜んでいるのだが、如何せん姫は武術を気に

入っておらず、稽古をよく逃げ出す。

稽古着ではなく普段着を着て、姫は部屋を出る。きよろきよろと辺りを見回しながら、城を出た。先日世話係に教えてもらった隠し扉から城の外へ出て、森へ向かう。

森の奥へ進むにつれ、音は大きくなる。以前森に迷ったときに聴いた音と同じ音色だ。ユウロは大きく息を吸って、コウタの名前を叫んだ。するとピタリと音がやむ。しばらくしてコウタの姿が遠くに見えた。

「コータっ」

「姫君、どうかしたんですか？　また迷子なら、外までお連れしますよ」

「ヒメじゃないよっ。ユウは、ユウロ！　おうち、でてきたの。けいこ、きらいなんだあ」

「稽古？　今どきの姫君は武術でも嗜むんですかねえ。まあいいでしょう、今日はなにをしますか？」

「えっとなえ」

その日から、ユウロは数日に一度だけ稽古を逃げ出して森へきた。コウタの横でただひたすらゆったりとした音色を聴く。それがユウロの唯一といっていい楽しい時間だった。

しかし、夢は唐突に終わりを告げるもの。ある夜、窓を叩く音にユウロは目を覚ました。ユウロの部屋は大きく、ベッドからベランダまでの距離だけでもユウロの短い足ではかなりの距離となる。

カーテンを開くと、そこには片膝をついて頭を下げるコウタがいた。

「コータ、どうしたの？」

「今日は姫君にお別れを言いに来たのですよ」

そう言って、コウタは切なそうに笑んだ。ユウロの瞳に、一瞬で涙が溜まる。

「な、なんでっ。だってコータ、ユウと一緒にいっつも遊んでくれ

たのに……っ」

「ええ。でも僕は、そろそろ行かなくちゃならないんです。もつと姫君と遊んでいたところですが、ね」

そう言つて、コウタは胡弓のケースから小さな玩具を取り出した。それはコウタが持っている胡弓をとて小さくしたようなレプリカ以下の楽器だ。音が鳴るかどうかすら、定かではない。

「これを、姫君に差し上げます。綺麗な音は出ませんが、よろしければお使いください」

では、と言つて立ち上がり、コウタは塀から塀を伝い、屋根から屋根へ飛び移りながらユウロの目の前から消えた。

翌朝、ユウロは世話係にベランダを開いてもらい、玩具を拾う。それをユウロは、枕元に置いて眠った。思い出すのは、胡弓を弾きながら恥ずかしそうに歌を詠む詩人の姿。

もう、十年以上前の話だ。

## 第一章 1

1

屋敷は炎の海に沈み、姫は一人の男と立ち尽くした。父や母を亡くしたことよりも、多くの国民が犠牲になったことが姫にとっては悲しかった。

私があなたに出会わなければよかったの？ と、姫は何度も男に言った。男は黙って姫の話を聞いていた。

二人の出会いは、一ヶ月ほど前に遡る。

派手ではない服を着た女が、橋を渡って城下町へやってくる。町の住民も最初のうちは驚いていたものの、それが毎日一年も続けば慣れたもので、子供たちなどは彼女にとってもよく懐いていた。

彼女は、国民に愛される姫君だ。

「おはようございます、ユウロ姫様」

「おはようございます。今日もいい天気ですね」

いろいろな店に顔を出しながら、ユウロは町を歩いていく。すれ違う度に、子供たちはユウロの服裾を引っ張る。これも、ユウロには心地よかった。

その日、ユウロは猫を見つけた。

「あら、猫だわ。珍しいわね、黒猫なんて。最近ではネコを見るとさえ珍しいのに。あ、ちょっと待ちなさいっ」

ユウロは物陰に逃げ込んだ猫を追って、路地裏へ入っていく。



この国に猫はほとんど存在しない。数年前に、猫は汚らしい獣として徹底的に駆除された。時に不吉の象徴とされる黒猫は、真つ先に処分された。

暖かい日の光さえ届かない、ひっそりとした裏道。カチャン、カチャンと音のするほうへ目を向けると、そこからちいさな少年が一つの箱を持って出てきた。

「ありがと、おじちゃんっ」

そう言つて、少年は足早に去つて行つてしまう。ユウ口は興味半分で、その中を覗き込んだ。中は通りよりも一層薄暗く、汚れたオレンジ色の光一つだけで照らされていた。奥に扉がある。

失礼します、と一応断つてからユウ口はその取っ手に手をかけた……そのとき。

「！」

腕を掴まれた。そこには一人の若い男。男は冷たい瞳でユウ口を一瞥し、奥の扉へ消えた。追つてユウ口も中へ入る。

部屋の中には、うつすらと入ってくる太陽の光を受けてまぶしくない程度に輝いている多種多様のガラス製品が並べられていた。ユウ口はそれを見て、男のほうへ目を向ける。男は大きな暖炉のようなものの前で、延々と水飴のようなものをいじっている。

「ねえ、あなたの名前は？」

「……」

「答えてくれてもいいじゃない」

だが、男は答えることはおろかユウ口のほうを向こうともしなかった。ユウ口は扉を勢いよく閉めて、その店を出て行つた。

「あ、姫様！」

「姫様、来てたの？」

町のメインストリートへ戻ると、子供たちが集まつて来る。ユウ口は笑いながら、彼らの相手をした。

ユウ口は数年前に兄を亡くした。否、正確には兄ではなく世話係なのだが。両親にも懐かなかつたユウ口が唯一懐いた相手。それが、

その世話係だった。彼はいつもユウロの傍でユウロを縛り付けない程度に世話をしてくれていた。彼は、国王からの指令で隣町まで荷を運んでいる際に、通りがかりの盗賊に襲われたのだという。盗賊は彼を殺し、荷を奪って鬭争。国王は彼が死んだと言うことよりも荷が奪われたことを嘆き、彼のことをことごとく罵った。以来、ユウロは国王・王妃である両親とはほとんど口をきかなくなり、姫としての業務以外は屋敷の外へ出るようになってしまった。

「……」

夜、窓の外を眺めながら思い出すのは世話係と詩人のことばかりだ。両親と楽しく会話した思い出など皆無に等しい。生みの親である王妃でさえ、ユウロが立ち歩くようになるや否や放任主義となつて乳母に任せるようになり、ユウロが小学生に上がるころには世話係が肉親のような存在となっていた。

（胡弓の音だ……どこから聴こえてくるのかな……）

懐かしい胡弓の音に耳を傾けながら、ユウロは眠りに着いた。

翌朝、ユウロは目が覚めてすぐに現在の世話係を呼んだ。無口で無愛想、その上冷酷でユウロに対する扱いが酷い。ことあるごとにユウロの行動にケチをつけてくるのだ。ユウロは彼を苦手と思って……否、嫌っている。

「なんでしようか、ユウロ姫様」

「……今日の仕事を、さつさと言って下がってちょうだい」

「今日はありません。ユウロ姫様は、遊びのためならばどんなお仕事も数時間で終わらせになれますから」

（相変わらず嫌味ね）

「他に何か御用がありますか」

「ないわ、下がりなさい」

世話係は軽く頭を下げて去って行った。

ユウロは窓の外を見て、空を見上げた。雲一つない快晴。ユウロ

はラフなスタイルに着替えて、街へ出向いた。

「あら姫様、朝早くからいらっしやるなんて、珍しいですねえ」

「おはようございます、姫様」

店先で品物の準備をしている夫婦に出会い、ユウロはニツコリ笑って頭を下げた。

長話を避けて、ユウロはガラス工房へ向かった。中はやはり薄暗く、今日はオレンジ色の光さえ消えていた。

（いないのかしら）

ユウロは疑問に思いながら、中へ足を踏み入れる。入り口からは死角になっている場所に、男はいた。

「……こんにちは。また、来たの」

ユウロが呟くと、男は一度ユウロのほうを横目で見て、再び正面に視線を戻した。壁の一点を見つめて、そこから視線を動かさない。

ユウロは何時間もそこにいた。何も言わずに、何時間もその工房に居座っていた。そして日が沈んでから、さよならを言って立ち去る。

それからさらに数日が経ったある日。その日もユウロはガラス工房へ来ていた。ユウロは男に『職人』という愛称をつけて、愚痴をこぼすようになっていた。相変わらず職人は壁を見つめたりガラス製品を作ったりと、ユウロの相手はしてくれない。

「私ね、好きな人がいるの」

その日、職人は例の大きな暖炉のようなものの前で延々と水飴のようなものをいじっていた。ユウロの言葉に一度手を止めたが、意に介さぬ様子で作業を続行する。そんな職人の様子を気にも留めず、ユウロは話しを続けた。

「いらぬのに、お父様は婚約の話ばかり持ってくるし、各国からの求婚者も後を絶たないし。私……本当に、その人以外とは結婚する気もお付き合いする気もないのに」

「……」

職人は何も言わず、ただ黙ってユウロの愚痴を聞いていた。パチツと音をたてて薪が崩れる。

ふとユウロが外をみると、すでに日は沈んでいた。

「あ、もう帰らなきゃ。じゃーね、職人」

ユウロがそう言って手を振ると、職人はガラスを磨く手を止めて、手を振り返す。特に表情を変えるわけでもなく、ヒラヒラと手を振って再びガラスを磨き始めた。

ユウロは再びさよならを言って、工房を出て行った。

ユウロが家へ帰ると、珍しいことに両親が出迎えてくれた。その後ろには、ユウロの世話係とメイドが二人いる。この二人がそろってユウロを出迎えるときは、碌なことがない。こういうときは、大体会話の内容が決まっていた。

「おかえりなさい、ユウロ」

「……何か用かしら」

「ええ、あなたの次のお見合いの」

「うるさいわね、私は自分で決めた人じゃないと結婚しないって言うてるでしょっ」

「でも、今回の相手は同盟に参加してる国の跡継ぎなのよ」

「……馬鹿じゃないの、そんなの私には関係ないわ」

それだけ言って、ユウロは部屋へ上がった。窓の外からは、胡弓の音が遠く響いている。

「コータ……どこにいるの、会いたいよ……っ」

口を開けば涙がこぼれる。十年以上前の記憶を思い出すだけで目頭が熱くなる。脳の奥がじんわりと麻痺するように痺れる。

あの夜を境にユウロの前から姿を消した胡弓弾きのコウタは、以降二度とユウロの前に姿を現さず、ユウロの耳に胡弓弾きの噂が届くこともない。

数日後、ユウロは部屋を出た。この数日、扉を出てすぐのところに番人が二人もいたため、外へ出ることが叶わなかった。ベランダの下にも見張りをつけられては脱出不可能というわけだ。

今日は例の見合いの日である。ベランダを開くと下に見張りはおらず、ユウロは小さくガッツポーズをとった。

そうしてベランダから脱出して、屋敷の外へ抜け出す。一度屋敷を振り返ったが、変化は見られない。

「……」

ユウロは橋を渡って、街へ出る。商店街を通過して工房へ急いだ。薄暗い裏道を走って、工房の扉を開く。

オレンジの光さえ灯っていない室内は、目を凝らさなければ足元さえ見えない状況だった。

「職人、いないの？」

声を振り絞るが、声は返って来ない。ユウロは床にへたり込み、職人がいつも座って壁を見ている椅子にうつぶせて眠りについた。

その日、職人は国の外へ出ていた。ある商人にガラス製品を買い取ってもらっていたのである。

国へ戻り工房へ向かう中途、職人はいろいろな人から声をかけられた。おそらく姫君・ユウロが最近職人のところに入り浸っているから、職人も怖い人ではないのだと思われたのだろう。

「あ、ガラス屋さん、お久しぶりです」

商店街で食材を買っていると、店の老婦人に声をかけられる。老婦人はにこにこ笑いながら老眼鏡をかけ直した。職人は無表情な瞳を老婦人に向け、軽く首を下げて裏道に入って行った。

店へ戻り電気をつけると、そこにはユウロがいるではないか。

「……」

「コータ……」

「……おい」

低い、低い声にユウ口は目を覚ました。目を擦りながらその姿を確認する。

「しょく、にん……」

初めて聞く職人の声。低音ながらも耳に馴染みやすい、優しい声だ。ユウ口は職人の顔を凝視したまま、硬直してしまう。

職人は眉間にしわを寄せて瞳を閉じ、一度息をついた。買ってきた食材の中から果物を一つ取り出してユウ口の手に乗せ、作業場のほうへ入っていつてしまう。慌ててユウ口も後を追った。

勢いよく燃える炎は踊るように揺れる。その炎を見つめながら、ユウ口は再びうたた寝を始めた。

自分自身が吹っ飛ばされるかのような奇妙な感覚に、ユウ口は目を覚ました。寝ぼけ眼を擦りながら室内を確認する。炎は消えていて、職人の姿もなかった。

「職人……？」

扉のところへ行くと、身をかがめた職人の姿。職人はユウ口の方へ向いて、人差し指を唇にあてた。

（黙ってるってことかな……でもどうして）

思考を最後まで続ける間もなく、爆音が聞こえる。作業場の天窓からは、星が見受けられた。もうどうやら夜らしい。

「ねえ職人……どうしたの？　ねえ、何が起こってるの？」

ユウ口が不安そうにそう尋ねると、黙ってろ、とでもいうようにユウ口を後ろでに抱きしめるような形で、ユウ口の口を両手で塞いでしまう。

「んーっ！」

「黙れって言ってるんだよ」

低く呟いた声に、ユウ口は体を縮こまらせておとなしくする。外では相変わらずの爆音と、銃声。そして……悲鳴が聞こえる。

恐怖の中、ユウロは職人に抱かれたまま眠りについた。

鳥の鳴き声も聴こえない、朝。作業場の天窓から差し込むまぶしいまでの陽光で、ユウロは目を覚ました。スースーと頭上で聞こえる寝息に上を向くと、そこには職人の顔がある。

「し、職人っ！」

「ん……ああ」

「ね、ねえ、私……私、どうしたの？ 昨日のあれは、なに？」

「……見ればわかるよ、行ってみるか」

「う、うん」

躊躇いがちにユウロが頷くと、職人はユウロを立たせ。そうして二人で外へ出て、屋敷のほうへ向かう。ところが……商店街へ出向いた瞬間、ユウロは地面へとへたり込んでしまう。

「そんな、嘘……」

「……」

紅く、血に染まった商店街。殺された人々。職人にしがみついて、泣き出すユウロ。

商店街の賑やかだった道は、大量の死体と血のにおいに満ちていた。見たことある老人や老婆の姿。ユウロの服裾を引いて走り去っていた子どもたち。全てが血塗れになって横たわっていた。

「なんで、どうして……っ」

職人はへたり込んでしまったユウロを横抱きにして、ゆっくりと裏道へ戻って行く。気を失ったユウロを床に寝かせてガタガタと準備を始めた。

\* \* \*

日の光が額に当たる。その暖かさ故か、ユウ口はゆっくりと瞳を開いた。傍らには職人が寝ていた痕跡があるが、すでにそこにはいなかった。

「……職人、どこ……？」

周りを見渡せば、そこは気の覆い茂っている森。故郷の森のようだ。あの、コウタと出会った深い深い森のような緑。

ユウ口は立ち上がり高くなった視界で周りをもう一度見回す。遠くで胡弓の響く音。それに導かれるまま、ユウ口は夢遊病者のようにのろのろとその方向へ歩き出す。

音の主は、大きな太い木の根に腰掛けて、ゆったりと胡弓を弾いていた。

「……しよく、にん……」

「？ ああ、起きたのか。気分はどうだ？」

「平気……あの、私、どうして……」

「……他国軍の襲撃によって国はほぼ壊滅。屋敷は全壊していて、およそ人の気配を感じられなかった。街で生きている人間も見えない。ここは、国から一番近い森だ。といっても、数キロのきよりではあるが」

「……国が……滅びた、の？」

「そういうことになる。俺の母国まで旅に同行してもらった。心配しなくても大した距離じゃない。そこで保護してもらえばいい」

そう言っ、職人には胡弓をケースに片付け始める。ユウ口は慌ててその手を止めた。

「ち、ちよつと待ってよ。私を一人にしないで。私、もう独りは嫌なのよ。職人も旅をするんでしょう？　なら、その旅に私も同行させて」

「……断る」

そう言っユウ口の手を跳ね除け、職人は胡弓をケースに片付け終える。ケースを木の根元に置いたまま、職人は軽く飛び上がった



一番低い木の枝に腰掛けた。

ユウロは少しも動かず、ただ地面の一点を睨み付けている。そのこぶしが強く握り締められているのを見て、職人は一度息をつく。

「俺は結局のところ、追われる身なんだ。あの国は隠れやすかった。これからまた隠れるところを探さなきゃならない。俺といると、危険に巻き込まれる危険性がある。一国の姫君でしかないあんたが旅に同行しても、すぐに死ぬのがオチだ。やめとけ」

「それでもいいの。独りで寂しい思いをするより、危険に身をさらして死ぬほうがよっぽどましよ」

「……我侬だな、あんた。ここまで我侬だとは知らなかった」

口元に笑みを浮かべて、職人は言う。少し声音が変わったことに驚きユウロが木の枝へ顔を向けると、職人が枝から飛び降りた。そうしてユウロの目の前へ着地する。

並んだことがほとんどなかったためわからなかったが、職人はユウロよりも二十センチ以上身長が高い。見上げた格好のまま、ユウロは口を開いた。

「私諦め悪いの。私も一緒に旅をしてもいいでしょう？　もう、嫌とは言わせないわよ。私、もう本当に独りは嫌なの。二度と……独りにはなりたくないの」

「……一緒に旅をするなら一つだけ言っておくが、あまり俺に話しかけるな。火の粉をかぶりたければ、な」

不敵な笑みを浮かべて、職人はユウロの頭を撫でてやる。

『姫君は本当に甘えん坊ですねぇ』

懐かしいコウタの声が聞こえる。ユウロはそのぬくもりに身を委ね、再び眠りに着いた。職人のほうへ凭れ掛かって、ゆっくりと夢におちる。

ひさしぶりにユウロは、コウタの夢を見た。夢の中、懐かしい笑顔で笑っているコウタはユウロよりも背が低い。

（コータ……なんで、私を置いてどこかにいつちゃったの……？）

明るかった景色が暗くなって、コウタが笑いながら遠ざかる。必死で追いかけるけれど、それにはちつとも追いつかない。

「コ、タ……」

寝言を漏らすユウロの頭を、ゆつくりと職人は撫でる。閉じた瞳から、ゆつくりと涙が流れる。片手でぬぐってやるが、それでもまた流れる。

「……そんなにアイツが好きかよ、馬鹿野郎」

手のひらを握る。すると寝ぼけた声を出しながらユウロが目覚めました。

「んん……」

「ああ、起きたか」

「ごめつ、寝ちゃった……」

「かまわねえよ。さ、そろそろ動くか……」

「……ねえ職人、あの、いまさら何だけど……私、旅とかしたことなくて、全然役に立てないと思うんだけど……」

「アホか。そんなん分かりきってるんだよ。じゃあアレか、お前は役に立たないから一人でいいのか。まあ俺はそれでもいいけどな」

「嫌！ 絶対にそれだけはッ」

「じゃあ決まりだな」

にっと笑って、職人は言う。

二人は森を出て、延々と続く砂漠地帯へと足を踏み入れた。

## 第一章 2

2

照り付ける太陽。潤されることのないどの渴き。少女は砂漠の上、一人旅をしていた。

「ちよつとお……どこにいるの、あの人ーっ」

ユウロと職人は、なおも砂漠の上を歩いていった。もともと砂漠の砂国で育ったユウロである、これくらいの暑さは大して堪えてないようだ。

一方職人は、長年の日陰生活が祟ってか、すでに意識が朦朧としてきた様子。

「職人、大丈夫？」

「暑いのは平気だ」

そう言つて、額に浮かぶ汗をぬぐう。遠くにオアシスが見えたことを伝えようと、職人はユウロに対してそうかと頷き、黙々と歩き続けた。平気と言つてはいるが、あまり顔色はよくなかった。

歩き続けること、もう何時間になろうか。そろそろ日が暮れようかという太陽の傾きの頃、職人はピタリと足を止めた。

「職人？」

「来る」

「へ？」

ユウロが間抜けな声を出した瞬間、職人がバツタンと前のめりに

倒れた。何事かとユウロは目を見張る。職人の上に、濃紺色のショートヘアをした少女が乗っかっている。

「シリア、探したよーっ」

「クロルか……お前は俺の邪魔しかりないんだな、本当に」

「今日は兄貴も一緒だから許してよ」

そう言っただけ少女は後ろを振り返る。しかしそこには人はおらず。おかしいなあと言っただけ少女が正面に顔を戻すと、ユウロに後ろから抱き着いている長身の男。次の瞬間、その男の米神に職人が銃口を押し付けていた。

ユウロはきょとんとして職人を見た。しかし職人はユウロの方を見ずに、男を睨みつけた。

「いい御身分だなあ、カズン」

「おーシリア。俺がて好きでやつとるんじゃないんで？ なんじゃっけ、ほら。女を見たらまず口説け」

「その行動理念どうかしやがれ」

なにやらわけがわかっていないユウロをはさんで、二人の男が口論を始める。長身で赤茶髪の男と、職人の言い争い。

すると職人とユウロの間に、少女がにゅっとやってくる。少女はユウロの顔を両手で包んで、にっこりと笑った。

「ねえシリア、この人、シリアのハニー？」

「馬鹿かお前は」

「お？」

職人は少女の首根っこをつかみ、投げ飛ばしてしまう。いとも簡単に吹っ飛ばされた少女は、頭から砂に突っ込んだ。

ユウロが解放されて、職人は男の米神から銃を退けた。

「シリアがそがあな風に女の子守るん、初めて見たなあ」

「うるさい。それよりカズン、お前馬車はどうしたんだよ。兄妹水入らずで旅してんのかよ」

「いや。クロルたあさつき会おたばかりで。ところで、このかわい子結局誰なん？」

男はユウロの頭を撫でながら言う。少なくとも、彼とユウロの身長は二十以上はあいているように見える。職人とはあまり違わないように見えた。

職人はユウロをちらつと見てから横目で少女を見やり、はあを息をついた。そうして男を見て、口を開く。

「コイツの名前は、ユウロ。つい先日まで姫君をしていた、女だ。国が崩壊したから、俺と旅をしてる」

「へえ、姫君。そりゃかわいいわけじゃ」

「ユウロ。コイツはカズン。旅人相手の商人だ。俺の作ったガララス工芸品を高値で売り捌いて来てくれてた」

「そうなんですか……あのっ、シリアって誰ですか？」

「なんじゃシリア、お前自己紹介しとらんかったんか。姫君、シリアつつうのはここにおる男じゃ」

「シリア、なんだ」

ユウロが納得したように頷いて、職人・シリアのほうを見ると、シリアは黙ったまましゃがみこんでいた。どうやら暑さが堪えている様子。今日、口数が多かったのは彼ら（否、彼のみか）が友好的な知人であったからなのかと納得し、ちらりと少女のほうを見る。するとそれに気付いたのか、男・カズンがユウロの肩を抱いて、少女のほうを指差した。

「それで、あつこの砂に埋もれとんのが俺の妹で、えーっと、クロル。基本的にやあ孤高の女盗賊じゃのお。俺と、シリアとクロルの三人は度々一緒に旅しとんじゃ。利害が一致した仲間つつー感じじやのお」

「え……しよ、じゃないや。シリア、私、邪魔？」

「……別に。いまさらだろ。っていうか、名前も今さらだから、職人でいい」

シリアがぶつきらばうにそう返すと、カズンはふむとあごに手をやる。そしてシリアの全身を上から下まで眺めて、ポンと両手を打ち鳴らした。

「シリア、そろそろ熱に疲れたじやろ。俺の馬車で次の国まで連れてっちゃうよ」

「助かる。姫君、行こう」

「姫君？」

「……ユウロ。行こう」

言い直してから職人はカズンについて歩き出した。その後ろを、少女・クロルが追ってきた。クロルはユウロの横について、にこつと笑った。

クロルはユウロの顔をじーっと見てその頬を撫でた、突然のことに、冷や汗が右頬を撫でた。

「かわいいね、あなた。シリアにしては珍しいかも」

「……え？」

「シリアは守ってあげたいタイプ、選ばないから」

クスツと笑って、クロルはシリアのほうへ走った。ピタリと足を止めて、動けなくなるユウロ。自分のことについて改めて、愕然となる。ユウロは、武器はおろか護身術すらできないのだ。昔から稽古は必ずといっていいほど抜け出していたし、護身術も真面目に習ったためしがない。

自分は役立たずなのだ。そう自覚し、一步後退りした、瞬間。振り向いたシリアの顔が見る見るうちに青ざめた。

「ユウロ、逃げろっ」

「え……」

『無駄だ』

黒い影がユウロを包む。目を見開いたユウロが助けるように手を伸ばすが……ユウロの姿は、影に飲み込まれた。シリアは影へと斬りかかるが、影はふわりと拡散して人型を模った影となる。

『久しぶりだな、シリア。姫君は頂戴した』

「お前にその姫さんは関係ないじやろお？」

剣を構えたカズンが、影に対峙する。影はクツクツと笑いながら、言葉と紡いだ。

『お前たち兄妹がなにをしようとも、小生の主が野望は消せぬ。主はこの『魔柔』と、シリアの『魔力』を手の内に入れ、世界を統べる存在となるのだからな。今はこの娘も返そう。二つを同時に手に入れぬことには、なににしても意味のないことだ。この度は牽制のつもりで参ったのだよ』

嫌な笑いを残して、影は消える。代わりのように、ユウロの姿が現れた。目を閉じてぐったりしているユウロにシリアがすぐさま駆け寄る。ユウロの上半身を起こしながらその頬を何度も叩き、意識を戻そうと試みる。

「おい、おいっ」

「とりあえず俺の馬車に乗せえ。すぐ近くの国まで送るけえ、シリアも乗れ」

「……ああ」

シリアはユウロを抱いて立ち上がり、カズンの馬車までおぼつかない足でゆっくりと歩き始める。その光景を見て……クロルはチツと舌打ちをした。

「なによシリアったら。あんな女がいいの？」

「諦めえ、クロル。シリアはずっとあの子が好きだったんじゃけん」  
「なんでよ。兄貴知ってるの？ あの子、姫様なのよ？ 一刻の姫君が、シリアみたいな一介の旅人と結婚したり恋愛したり、許されるわけ無いじゃないっ」

「……あの子に、帰る郷はない。或る国の姫君じゃったらしいが、先日、崩壊したと聞く」

「崩壊って……じゃああの子、国が無いわけ？」

「許す・許さんの問題じゃないんじゃけえ、お前がそんなん口出したかてどうにもならん。ましてやシリアは、他人の意見聞くような奴でもないし、気に入らん奴を終始傍に追いとけるほどお人好しでもない」

「それは、私だってわかってるよ」

カズンに向かって大きく舌を出し、駆け出すクロル。どうやら旅

を再開するらしい。

「絶対、あんな女の子にシリアは渡さないんだからっ」

一度だけ振り向いてそのセリフを叫び、前を向いてまた走りだす。カズンはやれやれと肩をすくめてから、駆け足で馬車の方へ向かった。

馬車の荷台には、商品の陰に寝かされたユウ口と、その傍でユウ口を見守るシリアの姿がある。

「……クロルじゃなあれど、珍しいな。シリアがそういうタイプの子とおるの」

「まあな」

「馬車、出すで？」

「苦労かける」

「お互い様じゃろ」

そう言つて手綱を握り、馬を動かす。陸であれば砂漠であろうが進めるこの馬は、通常の馬のスピードで砂漠を通過する。ラクダなら三日。馬なら丸一日あれば最寄の国へ着けるだろう。

翌日の昼過ぎ、馬車はようやく国へ到着した。入国審査を済ませて、馬車は街の中へ入っていく。

「じゃあシリア、街出るときは一緒じゃけえ、宿で待つとるわ」

「ほんと、苦労かけるな」

「気にするな。姫君、早う病院連れてつたり」

「ありがとう」

礼を言い、シリアはユウ口を抱いて病院へ向かった。

ユウ口が病院で診察を受け、宿で眠り始めてからすでに二日が経過した。医師の診断結果としては、至って良好とのことだった。眠りにについているようにしか見えないという。だが現に二日間ユウ口は眠り続け、まだ目を覚まさずにいる。

シリアはカズンと交代でユウ口を看でいて、今はシリアが看でい



る。ユウロは死んだように静かに眠ってるため、カズンは何度か本当に死んでいるのではないかと心配になったほどだ。

そのとき、コツコツとノック音がして扉が開く。

「おはよ、シリア。姫さんの目は覚めたか？」

「まだだ」

「そろそろ目が覚めないと、栄養が足りないんとちゃうか……？」

呆然とカズンが呟いた時、ピクリとユウロのまつげが動く。そしてゆっくりと、その瞳が開かれた。

「職人……カズンさん……」

「ユウロ、大丈夫か？」

「あの私っ、どうしてここに？」

「倒れてしもあたんよ。丸々三日間くらい眠っとったんじゃあや」

「そんなに……」

「元気になったなら良かった。俺は、病院に行って医師を呼んで……」

ユウロ？

立ち上がるうとしたシリアの服の裾を掴んだ。泣きそうな瞳でシリアを見て、なんでもないとというように首を振って手を離す。そうして自分にかけられていたシーツをぎゅっと握って、外を見ていた。

「……どうかしたのか？」

「なんでもないの。お医者さん、早く呼んで来て」

「カズン、頼んだ」

「了解」

苦笑して、カズンは外へ出て行った。看病用の椅子にどっかりと座り込んで、ユウロの方を向くシリア。ユウロは驚いて目を見張り、けれどすぐ逸らしてシーツの一点に焦点を定めていた。

シリアはユウロの頭を撫でながら、息をついた。

「なにか、不安になることでもあったか？」

ふるふると首を横に振るユウロ。根気強く、シリアはユウロの頭を撫で続けた。

「もしもクロルがなにか言ったなら、気にしなくていい。俺は別に

お前を情けのつもりで引き取ったわけでも、裕福になりたくて引き取ったわけでもない」

「……つあたしみたいな、役立たずと一緒に旅しててもっ、しょくにつの、足手まといに、なちゃう、から……っ」

「役立たずって……あの馬鹿、そんなこと言ったのか？」

「言ってないけど……私本当に武道とか、護身術すらできないし、絶対職人の迷惑に、なっちゃう……っ」

「……」

「シリア、医者」

「ああ」

カズンの声に、シリアは了解の合図をして許可をする。すると扉が開いて医者が一人、カズンに連れられて入ってきた。医師は手早く診察を済ませると、以上なしの結果を出して去って行った。

医師の帰った診察室で、シリアはユウロの方を向く。

「もしお前が、俺と旅するのが嫌ならそれでも別に俺はかまわない。一週間くれてやる。俺はこの街を留守にするから、お前は一人で子の街にいる。一週間後に迎えに来てやるから、それまでに返事を出せ。もし俺と旅するのが不安で嫌になった場合、カズンが俺らの故郷に送り届けてくれる。俺の国に住め」

有無を言わさぬシリアの言葉に、ユウロは恐々と頷いた。

そうしてシリアはカズンと共に一週間街を離れ、ユウロは一人取り残されることとなった。

\* \* \*

一週間後、街付近。

「あゝ、一週間以上シリアと行動一緒にするなんて、何年ぶりじゃろっな」

「俺は基本的に単独行動派だからな」

城門に到着して、入国審査を済ませる。そうして中へ入った直後、中心部の方から複数の悲鳴が聞こえた。慌てたようにシリアが馬車を飛び降りる。

「カズンは後で来い」

「ここで、馬車猛スピードで走らせたら怒られそうじゃしな」  
ククツと笑って言うカズンを見ずに、シリアは広場へ駆ける。

広場には人だかりが出来ており、ざわざわと騒がしかった。嫌な気配を感じ取り、手近にいた人になにがあったのか訊ねる。

「お兄さん、他の人？」

「ああ、先日入国して、所用で出かけていた。今日帰ってきたところだ」

「もしかして『シリア』さんかねえ？」

「俺を知ってるのか？」

「さつき、宿に泊まってた女の子がねえ、黒い獣に食われっちまったんだよ。それでその女の子を食った黒い獣がさ、『シリアに伝える』って、伝言を残したのさ」

「伝言？」

「『お前の姫君は預かった。返して欲しければ小生の城まで来るがいい』って。お兄さん、あの黒い獣と知り合いなのかい？」

「知り合いではない。ただ、心当たりはある。性悪の魔法師だ」

ギリツと奥歯を噛み締めて、宿へ向かう。一週間前、一週間の契約で借りがユウロの宿は、案の定空っぽだった。シリアは荒く呼吸しながら宿の契約を切って、カズンの方へと急いだ。

「カズン、ユウロが攫われた……っ」

「はあ？」

「アイツにユウロが攫われた。返して欲しければ城まで来いって、メッセージがあつたんだ」

「じゃ、行くしかんじやる。どうする、クロル呼ぶ？」

「あいつはいい。ユウロのこと良く思ってたみたいだし」

「けどもういたりするのよね」

声にシリアが振り向くと、そこには満面の笑みを浮かべたクロルの姿。しっかりと旅支度をしたクロルの姿を見て、ユウロは深い深いため息をつく。

カズンはクロルのほうを見て、ふむと顎に手を当てた。

「クロル。今回なあ遊びじゃないんだぞ？」

「だから言ったのよ。あんな『守られなきゃいけないタイプ』は、シリアには絶対合わないって」

「それをわれ、アイツに言うたんか？」

「言ってないわよ」

勝ち誇ったように言うクロルに、シリアはげんなりとしてカズンの方を向く。そうして三人は馬車へ乗り込み、入国一時間で出国する。ユウロの無事を祈るシリアやカズンとは裏腹に、いつそユウロが消えていればいいのにと願うクロル。三人を乗せ、カズンは馬を急がせた。

馬車の中、シリアはユウロを攫った敵について二人に説明を求められた。

「だって敵がわかんないんじゃないし」

「ねーっ」

二人の熱意ある視線に負けてか、シリアは肩を落として、馬車を絶対に止めないことを条件に説明を始める。

「ユウロを攫ったのは、魔女の使いである、使魔だ。魔女本体は城にいて、直接手は下さない。その魔女ってのは、俺が昔習った師のライバルで、世界を自分のものにしようとかくらんでる奴だ。俺はそいつの呪いを受けてる。そしてアイツは俺を手に入れて、世界を統べる計画に拍車をかけようとしてやがる。俺が、そんなことは許さねえ。俺の師を殺した仇も討つ」

「つまり相手は凄腕の魔女ってことね。了解。こんなところでシリアの役に立てる日が来るとは思わなかったわ」

くすくすつと笑いながら、クロルは言う。いかにも戦闘の術を持たないユウロを馬鹿にしたような笑い方だ。戦闘能力を持たない彼女はシリアの役に立てない、と言わんばかりの口調。

魔女の城までは馬車で三日、砂漠を過ぎたところにあるという。

## 第一章 3

3

暗闇の中、ユウロは目を覚ました。頭が痛くなり額を押さえ、自分がどうなったのかを思い起こした。

（たしかなんか、前みたいな黒い影に捕まって……それから、どうしたんだっけ）

「起きたかしら、お姫様」

「あなた、誰？」

「私？ 私はシエラ。初めまして、お姫様」

「職人やカズンさんはどこ？」

「いるわけではないでしょ。彼らは、ここへあなたを迎えに来るの。シリアも甘くなつたものねえ、あなたみたいな女一人のために命を捧げるなんて。ここへ来れば私の思惑通りなんて、頭のいいあの子が分らないわけないのに」

クスクスと嫌な笑みを浮かべながら、言う。月明かりに照らされて浮かび上がる女の姿は妖艶だった。黒く長いストレートの髪に、床につくほどの長く細いノースリーブのドレス。光を宿さない瞳。

女は妖艶に口端を上げて、ユウロの前に水晶玉を一つ置いた。

「これで彼らが城に入ってから様子は見れるわ。好きなだけ見なさい」

クスクスと嫌な笑いを浮かべ、女は部屋を立ち去る。どれだけ追いかけたい衝動に駆られたか分からない。しかしユウロは鎖によって拘束を受けているため、身動きすらままならない状態だった。

食事は定時、日に三回運ばれてくる。トイレのときは見張りつきで連れて行ってもらえる。けれど日を見ることは叶わなかった。

そんな生活が二日続いたある日、水晶に変化があった。今まで単なるガラス玉のような働きしかしていなかった水晶が、城を写した。そこに映っているのはユウロとカズンと……

（クロル、さん……）

その心の声が聞こえたのか、クロルは何かに気付いたように上を見上げた。それは水晶を通して、ユウロを睨みつけ、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

そうしてクロルは、シリアの腕へと自分の腕を絡め、水晶の視界から消えた。

\* \* \*

シリア一行は、ユウロ救出のため城へと入り込んだ。初っ端から何か仕掛けることはないかと踏んでいるため、シリアは臆することなく暗闇を歩き続ける。

そんなシリアについて行きながら、クロルは不満が渦々しく渦巻いていた。

「ねえ兄貴。なんでシリアはあんなにあの子を気にかけるの？ 戦闘能力もない単なる役立たずなのに」

「さあな。そりゃあシリアにしかわからんことじゃけん」

「おいお前ら。無駄口たたいてもいいが、第一の扉だぞ」

「オツケー」

この城には四つの関門がある。四つ目の関門をクリアすれば、最上階へ辿りつけるシステムだ。すなわち関門へ踏み込まない限り、敵に攻撃される心配は皆無である。

大きな軋みの音を立てて、巨大な樹の扉が開かれる。扉が開いた瞬間、壁に設置されているろうそくに火がついた。天井の電気で明るく照らされたその部屋にいた、最初の敵。

『初めまして。ワタクシ、シエラ様の第四部下であります』

「……第一手は俺が行こうかのお。いきなり主役登場じゃつまらんじゃないーて」

「……」

『原則勝負は一对一。仲間の手出しはルール違反とさせていただきます』

「エエよ、俺とやろーや」

カズンが身軽に闘技場へ入った。観客席のように二人のいた床が高見へと上がり、闘技場を見下ろすような形となる。

「さあ行くぜ」

剣を構えたカズンは、先手必勝といわんばかりにダッシュする。

大きな剣を横薙ぎに振りきり、敵を一発で半分にしてしまう。

「なんじゃ、呆気ないな」

『注意力散漫なのですよ』

低く声が呟いたかと思うと、カズンの肩を長い爪のようなものが貫通した。抜けると同時に、射された部位から夥しい量の血が流れ出す。

『笑わせないで下さい。まだワタクシは、第四部下なのですよ』

「うっさいわあっ！」

大声と同時に、銃弾を放つ。最後の銃弾を撃つと同時に、カズンは剣を振りかざし、敵目掛けて渾身の力を込めて振り下ろした。

敵は半分に切れ、白く拡散する。

『敵いません、シエラ様……すみません、ワタクシは先に逝かせていただきます』

そう呟いて、白い粒子は弾けて消えた。同時に高見台も消え、突然のことに上手く着地できなかったクロルは尻餅をつく。しかしシリアは空中で段を踏み、カズンの方へ駆けつけた。



「大丈夫か？」

「肩以外は怪我しとらん。心配すんな」

「……」

シリアは闘技場を見つめて、行こう、と呟く。その言葉にカズンは立ち上がり、二人は出口に向かって歩き始めた。その後を必死になつて、クロルが追う。

扉の向こうは階段になつていた。何階かわからないほど昇った。無論、普通に昇ったのではない。彼らの跳躍力と脚力を駆使した、忍者が屋根を伝うような感じで昇ったのである。

二番目の扉は鉄である。またしても大きな軋みの音を立てて、扉が開く。入ってすぐは最初から高見になつていて、闘技場は水上に浮いていた。闘技場の上には女が一人。

『お初御目にかかります。うちはシエラ様の第三部下です。お手柔らかに』

にこつと笑う女。シリアがカズンの方を向くよりも先に、クロルが闘技場へ入ってしまった。高見から闘技場までの道は『跳ぶ』しかない。

「私が相手よ、女！」

『よろしう頼みます』

柔らかく笑む女。ドキッとその笑みに身体を止めた瞬間、クロルの背後に女の影。

『遅すぎます』

「がはっ」

殴りつけられて、闘技場が揺れる。女を蹴り飛ばして立ち上がり正面を向こうとするが、闘技場が揺れるためどうにもバランスがとりにくい。

右手に腰に備えてある三本のスローイングナイフを持ち、左手に大きなハンターナイフを持つ。瞳を閉じて女の気配を探りながら、クロルはナイフを持つ手に力を込める。

『遅い』

「そこっ」

気配を察知した場所へ、スローイングナイフを三本連続で打ち込む。女は咄嗟に水へ潜ったが、その水も赤く濁っていた。

ハンターナイフを両手持ちに切り替え、女が来るのを待つ。しばらくして女は、血に染まった右腕を掴んで闘技場へ上がってきた。

『やるじゃない、女のクセに』

「闘うのに、男も女も関係ないもの。強いが、弱いかだけよ」

そう言っただけで女へ向かって突進する。すると女はしゃがみこみ、バンバンと床を叩き始めた。これが普通の床ならいざ知らず、水上に浮かべられただけの床である。走るだけでも揺れて走りにくいのだが、さらに追い討ちをかけるように揺れる床にクロルはバランスを崩す。

見越していたかのように、女はクロルへと飛びかかった。女がクロルへナイフを突き立てる直前、闘技場が真つ二つに割れて水飛沫が上がった。これではどちらがかったのか分からない。

「……クロル」

祈るようにしているカズン。ザバツと音がして、自ら誰かが出てくる。扉のある陸地に立って、こちらを向いた。

「クロルッ！」

カズンの叫びに、クロルはニッコリ笑って大きく手を左右に振った。二人は高見から飛び降り、空中で段を踏んで向こう側へ渡った。到着早々、カズンがクロルを抱き締める。

「死んだかと思つたぞ、馬鹿野郎」

「死なないよ。当たり前でしょ？」

そう言っただけでクロルはニッコリ笑って天井の方を見据え、勝気に微笑んだ。

\* \* \*

第一・第二と勝ち進んだ一行は、第三の門を通過し、第四の関門へ向かっていた。第三の門はほぼ無傷のクロルが戦闘していたが、どうやらそこで相当の深手を負ったらしく、その後は腕をずっと搦んでいる。

水晶で一部始終を見ながら、ユウロは奥歯をギリリと噛み締めるより他なかった。腕力も握力も無い自分は、こうして捕まえられていても自力で脱出ができない。かといって戦闘能力もないので、あの闘いの場にいたところで足手まといになるだけだ。

『一週間後に迎えに来てやるから、それまでに返事を出せ』

あの言葉は本気だった。これからシリアと旅を続けるか、足手まといになるから辞めるのか。辞めて、一人で生活するのか。無論一人は嫌だが、自分勝手な理由で足手まといになると分かっているのに旅に同行するのは勝手極まりないのではないだろうか。

「……」

「お姫様、気分はいかがかしら」

牢の中にシエラがやって来る。彼女が来ると牢の中の闇が一層その色を濃くしたように見えるので、ユウロは彼女がどうも苦手だった。

「シエラさん……」

「困ったことに、騎士たちは第三関門を突破してしまっただけだよ。まあ第四関門にいるのは私の一番の部下だし、負けるという心配は不要だと思っただけ。彼らが勝っても負けても、シリアには会えるから心配しなくても大丈夫よ」

口元に笑みを浮かべてスピカは言う。彼女の言葉には、シリアがここへ来るから会える言うよりも、シリアを捕獲するから会えるといった風に聞こえる。彼女の思惑が全く見えない。

「イイコト？ 小娘。あなたはね、生かされているのよ。あなたの中の、魔獣によって生かされているの。まったく、あなたが魔獣の住処になっただけじゃなかったらすぐさま殺していたところよ。まあ魔獣

を連れてなかったら狙うこともしなかったけれど」

それだけ言って嫌な笑みをこぼし、スピカは牢を去っていく。そんなスピカの背中を睨みつけ、水晶へ目を移す。三人はすでに第四関門の前へ立っていた。シリアが二人の方を見て確認し、扉を開くそのとき、クロルがこちらを向いて……笑う。四度目だ。城に入る前、第二・第三関門の後もこうしてこちらを向いて、勝ち誇ったように笑ってくる。

『あなたは闘えないけど、私はこうして闘えて、こうしてシリアの役に立てるのに、あなたは闘えないから役立たずなの』

そう言うように、彼女はこちらを向いて笑うのだ。ユウロに向かって『役立たず』と言わんばかりの笑みで。

「わかってるわよ……自分が役立たずってことくらいは」

不自由な両手拳を握り締めて、ユウロは奥歯を噛み締めた。

\* \* \*

第四関門に入る。そこは穴だらけの洞窟のような闘技場だった。おそらく、ここはもう数十階となっていることだろう。さすがに三桁には及ばないと思うがかなりの高さだ。

「……俺が闘う」

そう言って、シンリが闘技場に降り立つ。すると穴の一つから、影が現れた。影は地を這うようにしてシリアの前方に止まり、人型を模る。

『この形ではお初御目にかかる』

そう言って影は、本物の人間になる。男だと信じて疑わなかったが、そこにいたのは真っ白な女だった。真っ黒な髪に真っ白な肌。左頭部に面があるところを見ると、普段はそれをつけているのだろうか。真っ黒なボディースーツは、見るからに影と混じらせた。

「お前その声、一回俺の前に姿を現した奴だな」

『いかにも。小生はスピカ様の第一部下にして、戦闘部隊の隊長である』

「……女が、ね。勝負しようぜ。さっさと行かないと、ユウロが泣くんだ。森でもいつも泣いてたしな」

『先手はくれてやる』

「っ……そうかよっ」

言い放ち、刀を居合い抜きして女へと斬りかかる。しかし女はするりと素手で流して、影に溶け込む。

『そう易々と、お前に捕まったりはせぬよ』

声と同時に、影が穴へと消えていく。シリアは先ほどクロルがしていたように目を閉じて、気配を追った。だがクロルと違い、シリアは影がすぐ近くまで近付いても微動だにしなかった。

「シリアアッ！」

クロルが叫ぶのと、シリアが動くのは同時だった。刀を床に突き立てたかと思うと、影はするりと移動した。

しかし影はしっかりと、シリアの足に傷を残している。シリアの足の下には赤い水溜りが出来上がっていた。だがシリアはその傷を気にしないかのように一度その足を踏み込み、刀を下ろして脇に構えてそのまま再び固まってしまう。

シリアには何か考えあつてのことだろうと黙っているカズンとは裏腹に、心配で仕方ないのかしきりにシリアの名前を呟くクロル。先ほど同様動かないシリアへと忍び寄る影。その影には、光るものが見える。

そのとき影は、ふっと気配を消した。

「！」

「兄貴、影がマジで消えちゃったよっ」

さすがのことに焦るカズンだが、シリアを信じることに決めたのかクロルの言ったことに答えもせず、黙ってシリアの方を見据えていた。シリアももちろん気配が消えたことに動じただろうが、その

様は欠片たりとも見られない。

『これで終わりだ』

低い声が呟くのと、シリアの両肩を二本のナイフが貫くのは同時だった。シリアは一度傷みに眉を顰めたが、しかしそのナイフを掴む腕を捕まえ、女に退治した。

「捕まえたぜ、お前の尻尾……っ」

そう言っただけで女の片腕を右手で掴んだまま、左手で刀を握り、なぎ払った。女は半分に切れ、下半身が闘技場に転がった。

『勝てた、思ったが……』

「お前は強い。ただ、俺の方が強かった」

それだけ言うと、シリアは女が息を引き取ったのを見届けてから、動かない両腕を無理やり動かすようにして、カタカタと震えながら刀を鞘に収めた。そのままだらりと腕を下げたまま、次の扉を体当たりで開く。

「……あの馬鹿っ」

カズンが高見台を飛び降り、シリアの元へ駆け寄る。着ていた上着を脱いで両肩を包むようにきつく結んでやった。

「一応、応急処置。行かぜ、姫君助けるんだろ？」

「……ああ」

怪我をしているにもかかわらず、シリアは深く頷いて駆け出した。片足に加え両肩への刺し傷。痛くないわけがない。だがシリアは痛みを感じないかのような俊敏な動きで、怪我の度合いが低いカズンよりも速く階段を駆け上がった。

「敵わんよ、馬鹿」

苦笑しながらそう言っただけで、カズンはその場にへたり込んだ。

\* \* \*

シリアが、勝った。これでユウ口は解放され、またシリアと旅が出来るのだが……ユウ口の顔は、いまいち浮かばれなかった。

「どうしたの。シリアが勝ったのだから、私の賭けは一時中断よ。また次の機会を狙うわ」

言いながらシエラがユウ口の拘束を解いた。ユウ口は開放された腕を撫でながら、うつむいている。その両手両足首は赤くなっていた。

「……職人、大怪我してたね」

「そりゃあ戦闘だもの。闘いの中に身を置く者として、あの程度は予想の範疇だわ」

「でも私を助けになんて来なかったら、怪我なんてしなかった。私がいなかったら、職人は怪我なんてしなかったし、ここに来る必要もなかった……っ」

「馬鹿だろ、お前」

ユウ口を抱きしめる、あったかい腕。ユウ口は流れていた涙を止めることもせず、硬直してしまった。

力の入らない両腕で、ユウ口を抱きしめるシリア。

「ただいま、ユウ口。一人にさせて悪かった」

「職人……ごめんなさい、ごめんなさいっ」

「なんで謝るんだよ。俺、別に後悔もなんもしてないし、ユウ口が謝るようなことなんにもない。それよりお前、旅はどうするんだ？」

俺の怪我がどうか、戦闘能力がどうか言い訳するな。お前が、どうしたいか聞きたいんだ」

「私、が……」

ユウ口は呟いて、うつむく。いつの間にかスピカの姿もなくなっている。本当に今回は諦めてくれたらしく、殺気も全く感じなくなっていた。シリアはユウ口を抱きしめる腕にさらに力をこめる。

「私、は……もっと、職人と、カズンさんと、もっともっと、旅がしたい……っ」

そう言って振り返り、シリアにしがみついて泣き出す。シリアは

呆れたようにため息をついて胡坐をかき、その膝の上に乗せて、ポツポツとコトバを紡ぐ。ユウロは泣いていたことも忘れ、そのコトバに聞き入った。幼い日に聞いた、詩詠みの詩人のようだった。コウタを思い出さずにはいられない詩とリズム。耳に馴染む声。

「おい、ユウロ」

いつの間にかその心地よい音色に、ユウロは眠りについてしまった。肩の怪我が痛むシリアもユウロを置いては動けず、カズンを待った。

カズンが来てユウロを担いでもらい、カズンが壁を蹴り壊す。おそらく三桁になるであろう階数を、二人は恐れることなく飛び降りた。砂漠の果てへ着陸を目指して、三人の旅は始まったのである。

それももう、数年前の話となる。



## 第二章 1

1

ユウロが二十歳を過ぎてしばらくが経った。相変わらず三人で旅を続けている、シリア・ユウロ・カズンの三人。シリアはちつとも歳をとっていない様子だが、カズンは少しずつ三十路に近付いているといった感じを漂わせていた。

「姫さん、メシー」

「出来てるよ。職人はまだ？」

「え？ 俺が起きたときやあもうおらんかったけど」

「おかしいなあ。いないんだけど」

ユウロは鍋の中身をかき混ぜながら、辺りを見回した。彼らは旅人、基本はカズンの持つている馬車で旅をしている。

ユウロは呆れながら、餌を持って馬のところへ向かった。

「おはよう。ごはんだよ」

餌を地面に置きながら、ユウロは言った。馬がユウロのほうを向き、地面に置かれた餌を見る。そうして餌へと口を伸ばし、食べ始める。

ユウロはそれを見てから、再び鍋のある馬車の裏の方へ向かった。すでにシリアは戻ってきていて、カズンの横に座って二人で話している。

「職人、おはよ。どこ行ってたの？」

「おはよう。別にどこも」

「ふーん」

シリアが誰にも言わずどこかへ行くことは稀ではないので大して突っ込まず、ユウロは朝食の準備を始める。カズンとシリアの会話内容は聞こえないが、何か話しているらしい。

魔女に拉致されて数年、ユウロは目に見えて強くなった。だがそれは以前のユウロに比べればの話であって、三人の中では一番劣るカズンやシリアの足元にも及ばないだろう。

考え事をしていると、視界が真っ暗になる。

「な、なにっ」

驚いて振り返ると、そこには呆れたような表情をしているカズンの姿があった。その大きな手で、カズンはユウロの頭を撫でる。

「なんか考え事か？ 姫さん、悩み癖でもできたん？」

「うつん、なんでもないよ。さ、ごはんにしよう」

簡易食器にスープを注ぎ、二人に渡す。そうしてパンを切り、それも二人の食器の上に置いた。ユウロの食器が見当たらないが。

「ユウロ、メシは？」

「え？ 私、もう食べたよ？」

「嘘付け。食ってないだろ、見てたんだからな」

朝食を進めながら、シリアが言う。ユウロは息をのんで、諦めたように息をついた。自分の食器にスープを入れて、それを口にする。

「だいたいな、自分が食わないもんを他人に作ってんじゃねーよ」

「……ごめんなさい」

手早く食事を終えて、ユウロは食器を洗いに川へ向かった。鍋のスープをおかわりしながら、カズンはシリアを睨みつける。だが何かを言うわけでもなく、スープを山盛りについて自分の席に座った。しばらくして、ユウロが帰ってくる。そして空になっている二人分の食事と鍋を持って、再び川の方へ向かった。

川の水に食器を浸して洗う。炊事選択はユウロの仕事となっていた。戦力としては役不足なユウロはコレくらいしか二人の役に立てない。

「……いまさら、だよな」

皿を水につけたまま、ユウ口は手を止める。いまさらだが、ついでになればよかったと思うのだ。魔女に拉致されてから数年、あの頃に比べて戦闘能力は上がったとはいえ、同時にカズンやシリアの戦闘能力も上がっている。結局足元にも及ばない。それどころか一緒に旅をすれば足手まといにすらなりかねない。

魔女に狙われることは、この数年はなかった。獣や盗賊におそわれたくらいだ。だがそれでさえ、無傷の勝利は得られない。

「……」

「お前、何か考え事してるだろう」

シリアの声に驚いて皿から手を離す。流れそうになった皿を、シリアが受け止めて地面に上げた。

自分の考えていたことがばれたような気がして、ユウ口は水面を見つめうつむく。

「隠し事しててもわかるんだよ、お前は。昔から」

「昔の私を知ってる人は、もういないもの。両親も、国のみんなも、みんな死んでしまった」

「俺はお前の過去一点を知ってる。カズンだっているんだ。いまさら『同行しなきゃよかった』なんてくだらないことは考えない方がいいぞ」

「なんで、そのこと……」

「言ってるんだろ。お前が隠し事してても、俺にはすぐわかるんだよ。くしゃくしゃっと頭を撫でられて、ユウ口はほっと息をついた。

シリアはユウ口を見ているし、カズンもユウ口を見ている。自分が一人であったなどと思うのは失礼にあたる。

「ごめんなさい、職人」

「わかったんないいよ。ちゃんとメシ食えよ、次こそは。襲われたときに体力がありませんじゃあ話にならないからな」

「うん、わかった」

ユウ口は深く頷いて、皿洗いを再開した。

「姫さん、大丈夫そうじゃった？」

「また阿呆なことでも考えてたんだろ。もう大丈夫だよ、多分」

「多分かい。まあエエか。どの道、姫さんには行く場所も無いし、ここだけが家じゃろ」

「ユウロが一人になったら、何されるかわからないからな。あれから数年……そろそろ、警戒が必要だろ」

シリアはそう言つて、ユウロのいる川の方を見た。ユウロの背中だけは見える位置だ。まだ皿洗いが終わらないらしく、せっせと手を動かして皿を洗っている。

よいしょ、と声を出しながらカズンが立ち上がり、伸びをした。

「ちよいと、姫さん手伝つて来ようかね」

「警戒しろよ。あと、アイツが落ち込んでるみたいだったら、多分原因は自分が足手まといになるんじゃないかってあたりだろうから。つたく、何年も前にクロルが言つたことまだ気にしてんだよ、アイツ」

「シリア、姫さんと会ってから喉の調子良さそうよな」

「……そうか？」

不思議そうに首をかしげるシリアに笑つて返し、カズンはユウロのほうへ駆けて行つた。

カズンの言葉を反芻しながら、シリアはここ数年の事を考えていた。たしかにユウロの国が崩壊して一緒に旅をするようになってから、その道すがらよく話すようになっていたかもしれない。やはりユウロは偉大である。

「あーあ……詩でも詠まなきゃ、いけないのかね」

「シリア、終わったでー」

「お、遅くなつてごめんなさいっ」

「いいよ、別に。さ、食器片付けて次の国行こうぜ。砂漠国家は偉大だよな、次も？」

「次は……ま、しがない国じゃろ」

「……へえ」

地図を閉じながらカズンは答えて、馬車の手綱を掴んだ。声のトーンを下げてシリアはそれに返し、馬車の荷台へ乗り込む。そうしてユウ口を引き上げ、三人を乗せた馬車は動き始めた。

二人の不思議な会話についていけず、ユウ口はきょとんと首をかしげる。

「職人、どうかしたの？」

「別になんでもない。そうだ、お前これから周り警戒するようにしろよ。俺がカズンのどっちかと絶対一緒に行動しろ。わかったな？」

「……ねえ職人、やっぱり私足手まと」

「んな下らないこと考える暇あったら魔術の練習でもしてる。お前からは魔力の波動感じるんだ、隠してもバレバレだぞ」

「え？」

再び、首を傾げるユウ口。魔法とは何のことだろう。今まで使ったこともなければ、見たこともない。もちろん神話や御伽噺などで活躍しているので知らないわけではないが。この世にそんなファンタジーなものが存在するとは思っているわけも無いのである。

首を傾げるユウ口に驚いて、シリアはユウ口の額に手の平を当てた。魔力のコアは脳に組み込まれているため、これが手っ取り早い魔力の軽量方法なのである。魔法師としての資格を持っているシリアはそれができるのだ。

「……お前の魔力値、高いんだけどな。魔法使えないのか？」

「それ使えたら、足手まといじゃなくなるかな」

「別に今のままでも全然足手まといじゃないんだが……まあ魔法なんて全人類共通の能力じゃないから、使える奴の方がすごいのは確かだ。そこにいる赤毛の馬鹿も使えない」

「馬鹿とはなんじゃあつ」

手綱を引きながら反論してくるカズンに、ユウ口がクスクスと笑い出す。それに安心してか、シリアはユウ口の頭をゆっくりと撫でてやる。

「俺もカズンもお前のこと足手まといなんて思っただけから、もう自分が足手まといなんて思っただけ。クロルが何言っただけ知らないが、アイツは孤高の女盗賊だ、強くて当たり前なんだよ。お前は確かに旅には向かないけど、でも頑張ってる。強くなるうともしてる。そういう奴を足手まといだとは思わない」

「……ありがとう、職人」

「それに俺は姫さんのメシ、好きじゃしね。もう姫さんの手料理なしじゃあ生きていけんわあ」

笑いながらカズンは言う。じゃあお前いつか死ぬな、というシリアの反論にも負けじと返すカズンに、ユウロは再び笑い出す。自分の居場所を見つけた安心感から、大きく大きく笑った。

次の国までは二日だと聞いていたが、一行が国に到着したのは出発から四日後だった。

「珍しいね、狂っちゃうの」

「まあこんなこともある。さっさと宿とるぞ」

「あーシリア、俺はちよつと、行ってくる」

「……わかった。じゃあな」

馬車を預けて駆けて行くカズンの背を見送って、シリアはスタスタと歩き出した。

「わ、職人っ、速いよッ」

「悪い、考えてなかった。一人になるなって言っときながら、勝手だったな」

「大丈夫？ 職人、顔色悪いよ。早く宿に行こう」

「……ああ」

ユウロに手を引かれ、シリアは手近な宿へ入った。宿の従業員は二人を訝しげに眺めながら、四人部屋の鍵を二人に手渡した。

部屋に入っただけ、シリアはベッドへと横になる。この二人と旅を始めて、ユウロは部屋を分けて欲しいと頼んだことは一度もなかった。国に入れば三人一部屋の宿、旅に出れば三人で外で寝るか馬車の中で寝るか。どちらにしろ一緒である。

「職人、寝ちやったの？」

話しかけるが、返事はない。どうやら相当疲れていた様子。外に出ようと思っていたユウ口はがつくりと肩を落とし、バルコニーに出て街を見下ろした。賑やかな街の向こうに、城が見える。ユウ口の国とは違う真正正銘の城である。

「……いいなあ、国があつて。そうだ、ちょっと出掛けて来よう。職人まだ起きないし」

こそこそと扉を開けて、ユウ口は外へ出て行く。

何か祭りでもあるのか、街はとても賑わっていた。いたるところに旗が掲げられているが、異国語のため読むことが出来ない。ユウ口は聞いたり話したりという能力には長けているのだが、読み書きがとても苦手なのである。未だに自国の文字以外の読み書きが出来ない。ただし世界百余国、半数以上の言語を理解し、話すことは出来るのだ。

ユウ口は人通りの多い商店街を歩きながら、道行く人々を眺めていた。

「国民だあ……いいなあ、本当」

泣きそうになり、路地裏に逃げ込む。まさかあんな大勢の前でいきなり泣くことなど出来なかった。かといって路地裏とはいえこんな街中で泣けるほどユウ口は強くもない。

「……」

「もしかして、ユウ口姫でありますか？」

「え……？」

顔を上げると、そこには茶色の髪をした青年が腰をかがめてユウ口を見ていた。いくら髪を切り風貌が変わったとはいえ、ユウ口のこと分かる人は分かるらしい。ユウ口は瞳に溜まった涙を拭い、立ち上がった。それに合わせて青年も立ち上がり……グツと、ユウ口の唇に布を当てた。

「！」

「失礼します」

青年は口元に笑みを浮かべて、倒れ込むユウロの体を抱き支える。ユウロはふらつく足を必死で立たせながら、途切れそうになる意識をつなぎとめていた。

（職人、職人……っ）

「こちら、商店街路地裏。ユウロ姫の捕獲に成功しました。今から運びます」

どこにだろう。その思考を最後に、ユウロは意識を飛ばした。

花火の音に、シリアは目を覚ました。部屋の中が真っ暗なことに気づき、のんびりと身を起こす。うつ伏せで寝ていたせいか、躰が痛い。

「ユウロ、カズンは戻ってきたか……？」

窓の外をみながら、そう問いかける。だが返事は返って来ない。寝ているのかと思いきや残り二つのベッドを見るが、誰一人としていない。カズンも、ユウロも。

「……！」

ようやく事の重大さに気づき、シリアは刀片手にバルコニーから部屋を飛び出した。屋根伝いに城へ向かう。その道すがら、城の用人を発見した。

「おいお前ッ」

即座に抜刀、首筋に刃を当てながら、青年に問いかける。

「お前、銀髪の女を知らないか？」

「銀髪の……？ はて。ご存知ないですな」

「知っているだろう、お前なら。ユウロ姫だ」

「存じ上げております。ですがあの国は崩壊したと聞いていますし、姫君も亡くなられたのでは」

「……もったいない」

シリアは刀を納めて、再び屋根へ上がり、城へ向かった。



表向きの十階、一番左。そこはカズンの部屋である。彼はこの国の王の子供なのでこの城に自室がある。その場所を知っているシリアは、カズンの部屋のベランダに着地して、その扉をノックした。カーテンが開き、カズンが姿を現す。商人とは違い、正装をしているカズン。

「……大丈夫か？」

「俺は平気じゃ。……けど、俺、もう旅が出来んかも知れん。親父とお袋が、なんや勝手にまた結婚相手決めたんじゃ。くそつ、なんで俺が結婚せんじゃいけんのじゃッ」

「結婚相手は？」

「相手は知らん。この後、会いに行く予定じゃけど……シリア、姫さんはどしたん？ 一緒におらんのか？」

「ユウロもないんだ。アイツ、俺が寝てる間にどっか行っちゃったらしい。……多分、ここに連れ込まれたんだ」

「じゃあもしかして、俺の結婚相手って」

「可能性はある。だけどユウロの国はすでに滅びてるから、結婚したところでなんのメリットも……」

そこまで言ったとき、部屋の扉がノックされた。カズンが気だるそうに返事をする、凜とした声が返って来る。

「そろそろお時間です」

「わかった」

そう言って、再びシリアのほうを向く。

「これから会いに行ってくる。お前、小さくなれるか？」

「……仕方ないな」

「決まりじゃな」

シリアは二言三言の呪文を呟き、自分に魔法をかける。するとシリアの軀が見る見るうちに縮まり、姿を消した。どうやら小さくなっただけでなく、カズンが小さくなったシリアを摘み上げた。

「ええか、大人しく見とけ」

「わかってる」

カズンはシリアを胸ポケットに入れて、部屋を出た。

地下の、冷たい場所へ通される。親に“真っ直ぐ進め”と言われて下りた階段は、ずいぶん下までつながっていた。ようやく到着したかと思うと、今度は長い廊下を進まなければならなかった。老化が終了したかと思うと、今度はエレベーターに乗らなければならなかった。しかも数階ではなく、明らかに数十階は地上へ上がった。

ここまでの道のり、カズンは親との受け答え以外一つも口を開かなかった。

エレベーターが停止し、その正面にいたのは結婚相手とはかけ離れた姿の人物である。旅人の装束を身に纏ったまま、鎖で両手両足を拘束されているユウ口の姿だった。いくつかの傷も見受けられるし、捨てられるようにして石詰め床に転がされ、その目は閉じている。慌てて駆け寄ろうとして、何かにぶつかって跳ね飛ばされた。

「つてえ……」

「クリアシールド……」

「姫さんっ」

負けじと、見えない壁を叩いてユウ口を呼ぶカズン。すると壁の向こう側に、すなわちユウ口の傍に、王と王妃が現れた。カズンの父君と母君である。

「ウィズ。そろそろ遊びも終わって、城へ戻って来い。お前は兄と違い、この城を継ぐんだ」

「……親父とお袋は、まだキャズを馬鹿にするのか」

「あんなモノ、息子でもなんでもないからな。穢れた血の持ち主など要らぬ」

「……」

胸ポケットから出て、地面へ着地するシリア。そうして小さく呪文を唱えて、元の姿に戻った。

「このシールドを十五秒だけ無効化する。アイツらも俺が止めるか

ら、お前はユウロ連れて逃げろ」

「お前、自分の命賭ける気か？」

「馬鹿。俺がそう簡単に捕まるかよ。いいか、十五秒だ。それ以上は無理だと思え」

「わかった」

「……」

小さく呪文を唱えて、ユウロは行けと呟いた。今度はすんなりユウロに駆け寄るが……鎖が、取れない。

「シリア、鎖が！」

「っ……」

冷や汗を垂らしながら、人差し指を王夫妻に向けて呪文を呟き続けるシリア。カズンも負けじとナイフで鎖を切ろうとするが、ナイフ如きで鎖は切れない。

「シリアッ」

「っああああっ」

シリアの叫びと同時にその部屋が爆破し、爆風でユウロとカズンは吹き飛ばす。しかしその後を、シリアが落ちてくることはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3848c/>

---

或る姫君に捧ぐ詩

2010年12月2日08時28分発行